

令和 4 年 6 月 23 日現在

機関番号：25502

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00283

研究課題名（和文）『新潮』編集に関する榑崎勤宛書簡の調査研究

研究課題名（英文）A documentary research of the editing process of Shin-cho, with focus on the letters to Narasaki Tsutomu

研究代表者

加藤 禎行 (Kato, Yoshiyuki)

山口県立大学・国際文化学部・准教授

研究者番号：10318727

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、昭和期の『新潮』編集に従事した、編集者榑崎勤に宛てて書かれた、さまざまな文学者による書簡についての、基礎的な調査及び研究を行うことを目的としている。これらの文学者たちの書簡からは、文芸雑誌編集者が担うことになる業務の多様性や、文学者と編集者の人間関係をうかがうことができる。これらの書簡についての研究からは、いくつかの文学史上の事実を積み重ねることができる。そしてこの研究は、昭和期の日本文学史の記述を拡充していくことができる営為であったと考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本近代文学の研究対象となるテキストは、小説や詩歌などの作品としてのテキストだけでなく、日記や書簡などの文学者たちの私的な状況を伝えるテキストもまた、調査研究の対象となる。本研究で取り扱った榑崎勤宛の諸作家からの書簡は、榑崎勤が昭和戦前期の『新潮』編集者であったこととも関係して、昭和戦前期の雑誌『新潮』の編集状況や文学状況を現在に伝える、文学資料ということになる。これらの資料の調査研究を行うことで、まだまだ明らかになっていない昭和期の文学史について、基礎情報を積み重ねていくという学術的意義があると考えられる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to conduct a basic survey and research on the letters by various literary persons written to the editor Tsutomu Narasaki, who was engaged in the editing of "Shincho" in the Showa period. From the letters of these literary persons, we can see the diversity of work that literary magazine editors will be responsible for and the human relationship between literary persons and editor. From this research on these letters, some facts in literary history can be accumulated. And this research can expand the description of the history of Japanese literature in the Showa period.

研究分野：日本近代文学

キーワード：新潮 新潮社 榑崎勤 雑誌メディア 編集者

1. 研究開始当初の背景

本研究は、昭和戦前期の雑誌『新潮』の編集に従事した作家・編集者の榎崎勤に宛てられた諸家の書簡についての調査研究である。対象となる榎崎勤宛諸家書簡は、山口県立大学が所蔵する49通の書簡を調査対象としている。

日本近代文学研究における雑誌編集の実態解明はまだまだ不明瞭な箇所が多い。作家と編集者の関わりを解明することは、作品の成立事情を考える場合でも、メディアの諸相を検討するうえでも重要だ。本研究が調査対象とする榎崎勤宛諸家書簡を検証することで、編集者と作家の関係から浮かび上がる場としての雑誌メディアの問題を考える。原稿料や事務手続き、実際の原稿締め切りや編集実務等、これまで具体的な資料に基づいて考えることができなかった事象について、少なくとも雑誌『新潮』については、いくつかの資料に基づいて実証的に言及することができるはずだ。残された書簡資料を実証的に研究することは地味な作業だ。しかしながら、断片から慎重に全体を模索するこの営為は、昭和期の日本近代文学研究のみならず、雑誌メディアのあり方を考えようとする人文諸科学にとって有益な着眼点をもたらすと考えられる。

2. 研究の目的

榎崎勤と雑誌『新潮』の編集状況をめぐる学術的背景は、決して充実したものではない。もちろん、大村彦次郎『ある文芸編集者の一生』(2002年9月、筑摩書房)のように、評伝形式で、榎崎勤の伝記的事項を丹念に素描し、また榎崎家調査から得られた、昭和20年の千葉県疎開時の日記紹介など、貴重な資料の掘り起こしが示されている。とはいえ、雑誌『新潮』にかかわる中村武羅夫や加藤武夫、あるいは野原一夫といった個性的な編集者達の間で、編集者そして作家としての榎崎勤はやや地味な立ち位置にいる。この榎崎勤という人物の再評価を試みていくことが大きな目的であった。そしてまた、榎崎勤没後の榎崎家は生活不如意もあったため、多くの榎崎勤宛諸家書簡は市場他に散逸してしまっている。この研究計画に取り組みすることで、榎崎勤書簡にまつわる研究フィールドを形成することができるのであれば、これもまた本研究計画の目的である。

3. 研究の方法

本研究は、人文科学における文献資料調査に基づく研究であり、その調査対象となる榎崎勤宛諸家書簡についての調査研究については、およそ以下のような順序と方法によって行われる。

書簡・葉書、封筒等の採寸。

消印等の郵便物情報の採取。

書簡本文、封筒の表書き・裏書きの翻刻。

書簡が言及する作家・作品・出版物(『新潮』等の当該号など)の調査・研究。

書簡資料が提示している出来事や証言等についての文献資料調査。

当該書簡資料の価値付け。

こういった作業を行っていくために、600dpiフルカラーのJPEGデータの作成し、デジタル処理された画像データを取り扱っている。こうした画像データを閲覧することで、判読しにくい消印のデータ等についても画像のコントラスト調整により濃淡を操作し、判読できるケースがあるためだ。もちろん原資料を劣化させないという目的があるのはもちろんのことだ。

また書簡本文の翻刻、テキストデータの作成も行なっている。この作業で得られた書簡本文については、そして、雑誌『新潮』等の閲覧を通じた文献資料調査を通じて、その書簡で取り扱われている事項、現象等についての確認を行なっていくこととなる。もちろん、関連する作家の全集や先行研究等とも付き合わせながら、明らかにすることができる事実を明らかにした上で、当該の書簡資料を価値付けていくというのが、本研究における研究方法の一連のフローである。

4. 研究成果

「榎崎勤宛佐多稲子書簡について 一九五七年春、女性作家が旧知の元編集者に送った手紙」(山口県立大学『山口県立大学学術情報』2020年3月31日、第13巻、pp79-89)は、本研究成果の一部となるものである。

採り上げたのは、山口県立大学が所蔵する榎崎勤宛佐多稲子書簡三通。これらの書簡は、2006平成18年9月7日、御遺族の長女榎崎百合子氏から山口県立大学に寄贈されたもの。この佐多稲子書簡の寄贈にあたっては、山口県文化振興課担当者(当時)に、榎崎勤御遺族とのなかだちとして御尽力を頂いた。そしてまた、書簡の公開にあたっては、中原中也記念館名誉館長の福田百合子氏に、著作権継承者を紹介していただき、その御了解を得た。

榎崎勤(1901 明治34年~1978 昭和53年)は、山口県萩市出身の新興芸術派の作家で、『神聖な裸婦』(1930 昭和5年4月、新潮社)、『相川マユミといふ女』(1930 昭和5年10月、新潮社)などの創作集を発表しており、そしてまた雑誌『新潮』の編集に携わった編集者としても、文学史にその名を留めている。その文壇回想録『作家の舞台裏 一編集者のみた

昭和文壇史』(1970 昭和 45 年 11 月、読売新聞社)は、昭和文学史の一コマを記録した資料としても、しばしば言及される一冊である。

書簡の差出人である佐多稲子(1904 明治 37 年～1998 平成 10 年)は、長崎県長崎市出身のプロレタリア文学派の作家で、『キャラメル工場から』(1930 昭和 5 年 4 月、戦旗社)、『研究会挿話』(1930 昭和 5 年 7 月、改造社)などで知られる。雑誌『驢馬』(1926 大正 15 年 4 月創刊)の同人として知り合った窪川鶴次郎と 1926 大正 15 年 7 月から結婚生活を送るが、1945 昭和 20 年 5 月には離婚している。この窪川鶴次郎との結婚生活を題材とした『くれなゐ』(1938 昭和 13 年 8 月、中央公論社)は、昭和戦前期における転向文学の代表的な小説となっている。戦後は『樹影』(1972 昭和 47 年 8 月、講談社)で野間文芸賞を受賞しており、昭和期を代表する女性小説家のひとりである。

採り上げた榑崎勤宛佐多稲子書簡は、1941 昭和 16 年 2 月 2 日消印のもの、1946 昭和 21 年 8 月 13 日消印のもの、1957 昭和 32 年 4 月 4 日消印のもの三通である。すでに刊行されている『佐多稲子全集』全 18 巻(1977 昭和 52 年 11 月～1979 昭和 54 年 6 月、講談社)は、佐多稲子書簡を掲げてはおらず、また『文学者の手紙 7 佐多稲子 中野重治・野上弥生子ほか来簡が語る生の足跡』(2006 平成 18 年 5 月、博文館新社)の刊行に見られるように、佐多稲子の書簡資料については調査研究と情報収集がようやく始められたばかりである。そこで本稿では、この榑崎勤宛佐多稲子書簡の本文と写真版による書簡画像の掲載、そしてその解説を試みた。

日本近代文学の研究領域には、伝記的研究、作品研究、書誌学的研究などいくつかのアプローチがあるが、昭和期の文学者については、まだまだ資料的な情報蓄積が不十分で、書簡や日記などの新出資料・未発見資料は多く存在する。したがって新出資料・データを研究者コミュニティで情報共有して行くことは意義深く、その積み重ねこそが、やがては日本文学史を編成していくことになる基盤研究としての営為であると考えている。

近代以降の私信を資料として研究するこの研究計画は、私信の公開に際して、直面する問題がある。手紙の送信者について没後 50 年が経過していない場合は、書簡もまた著作物であるという見地から、著作権法の保護を受ける。また書簡資料は著作物であると同時に、雑誌掲載等の公開・公表を前提として書かれた創作の原稿とは異なり、私信であるためプライバシーの問題にも触れることとなる。

現在、日本著作権協議会刊行の『著作権台帳』は、個人情報保護の見地から、2001 年第 26 版をもって刊行を停止している。こうした個人情報保護の時代において、書簡の発信者のなかに、著作権継承者や私信の公開の是非を判断できるご遺族にコンタクトできないと事態は起こりがちだ。しかしながら本研究計画終了後も、粘り強く関係者や遺族の探索を続け、書簡公開の営みを継続的に遂行して行こうと考えている。書簡資料の翻刻および解題作成の成果を、公開に結びつけられるよう、事後的にも研究活動を推進して行く予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 加藤禎行 | 4. 巻 第十三号 |
| 2. 論文標題 「榑崎勤宛佐多稲子書簡について 一九五七年春、女性作家が旧知の元編集者に送った手紙」 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 『山口県立大学学術情報』 | 6. 最初と最後の頁 79-89 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| 氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号） | 所属研究機関・部局・職 （機関番号） | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|